

スケート部 アイスホッケー



1982(昭和57年)・12・21~24 第55回日本学生氷上競技選手権大会。日光市にて。日本アイスホッケーの草分け的存在であった慶應は、元来あたりの強いチームとして恐れられていた。走り回ってガツガツ当たり、強いシュートを打ってリバウンドをはたく。こうした力で攻めるアイスホッケーが慶應の伝統である。



1933(昭和8年) 全日本学生選手権、優勝メンバー。



1953(昭和28年) 五大学リーグ戦(対明大)、この年優勝。



1953(昭和28年) 五大学リーグ戦、試合前の練習。

創成期の時代

1925・1 第1回全日本学生選手権大会にス

ケートクラブとして参加。スピードは暖冬のため中止だったが、アイスホッケーは1回戦に早大と対戦、敗退。フィギュアは団体6位。

1926・1 全日本学生もスケートクラブとして参加。アイスホッケーは2回戦で東京帝大に惜敗。スピードは平林が200メートル2位、500メートル2位、1000メートル優勝。平川が1500メートル3位、新城が5000メートル2位、平川、高畠、新城、平林の2000メートルリレー優勝と好成績をあげ、団体で2位を占めた。第3回は中止。

1927・4・19 スケートクラブは体育会に加入。部長は園乾治先生で、その後、42年間お引き受け頂く。

1928・1 第4回全日本学生は体育会の部として初の参加。アイスホッケーは満州医大に決勝で敗れ2位。スピードは金子が1000メートル3位。2000メートルリレー3位で団体3位。フィギュアは金子優勝、新城5位、平林のトリオで団体初優勝。

1929・1 第5回全日本学生では、アイスホッケーが初優勝。スピードは金子が10000メ

1927(昭和2年) スケート部創立当時のメンバー。初代部長園乾治先生を囲んで。1929年卒業生送別会にて。





1956(昭和31年) 全早慶定期戦、早稲田に敗れる。



1957(昭和32年) 松原湖合宿での練習。



1954(昭和29年) 五大学リーグ戦優勝、2連覇のメンバー。



1965(昭和40年) 早慶戦、フェンス際の激突。



1985(昭和60年) 東京大学リーグ戦(対大東文化大)、ゴール前の激突。



1985(昭和60年) 早慶定期戦、ニュートラルゾーンでのドリブル。

ートル3位、藤野、安藤、鈴木、久保田の2000メートルリレー3位で団体3位。フィギュアは金子優勝、西川3位、和田のトリオで団体、個人共2連勝。金子はホッケーにも出場して大活躍。

1930・1 全日本学生はアイスホッケーが2連勝を遂げ、スピードは2000メートルリレー3位等で団体3位。フィギュアは金子優勝、帯谷3位、和田のトリオで団体、個人共3連勝。第1回全日本選手権大会は、アイスホッケー優勝、フィギュアで金子2位、帯谷4位と上位を占めた。この時代までは多くの先輩が複数種目に掛け持ち出場して活躍、3部門の専門化は1931年以降に見られた。

アイスホッケー

1933 全日本学生選手権優勝。

1934 全日本選手権、全日本学生、東京大学リーグ戦でいずれも優勝。

1935 全日本学生優勝、東京大学リーグ戦2位。これまでは第1期黄金時代といえる。

1936~1940 全日本選手権ではベスト4が3回。全日本学生では4位が1回、ベスト4が2回。東京大学リーグでは2位および3位が1回。

1941~1952 全日本選手権では1941年に2位。全日本学生では1951年に2位、1953年に3位。東京大学リーグでは2位1回、3位2回と戦争を挟んでしばらく優勝することがなかった。

1952 関東学生選手権が始まり、この年は4位。

1953 東京大学リーグ優勝。

1954 東京大学リーグ2連覇。第2期黄金時代に入った。

1955~1965 全日本選手権ではベスト4が1回。全日本学生では3位1回、4位1回。関東学生では3位4回、4位2回。東京大学

リーグでは3位5回となった。

1966 関東学生及び東京大学リーグで惜しくも2位。

1966~1974 全日本学生では3位2回、4位3回。関東学生では2位1回、3位3回。東京大学リーグでは2位1回、3位3回となった。この間、優勝こそは出来なかったが常に上位に位置し、健闘した時期といえる。

1970 この年から全日本選手権に不参加。

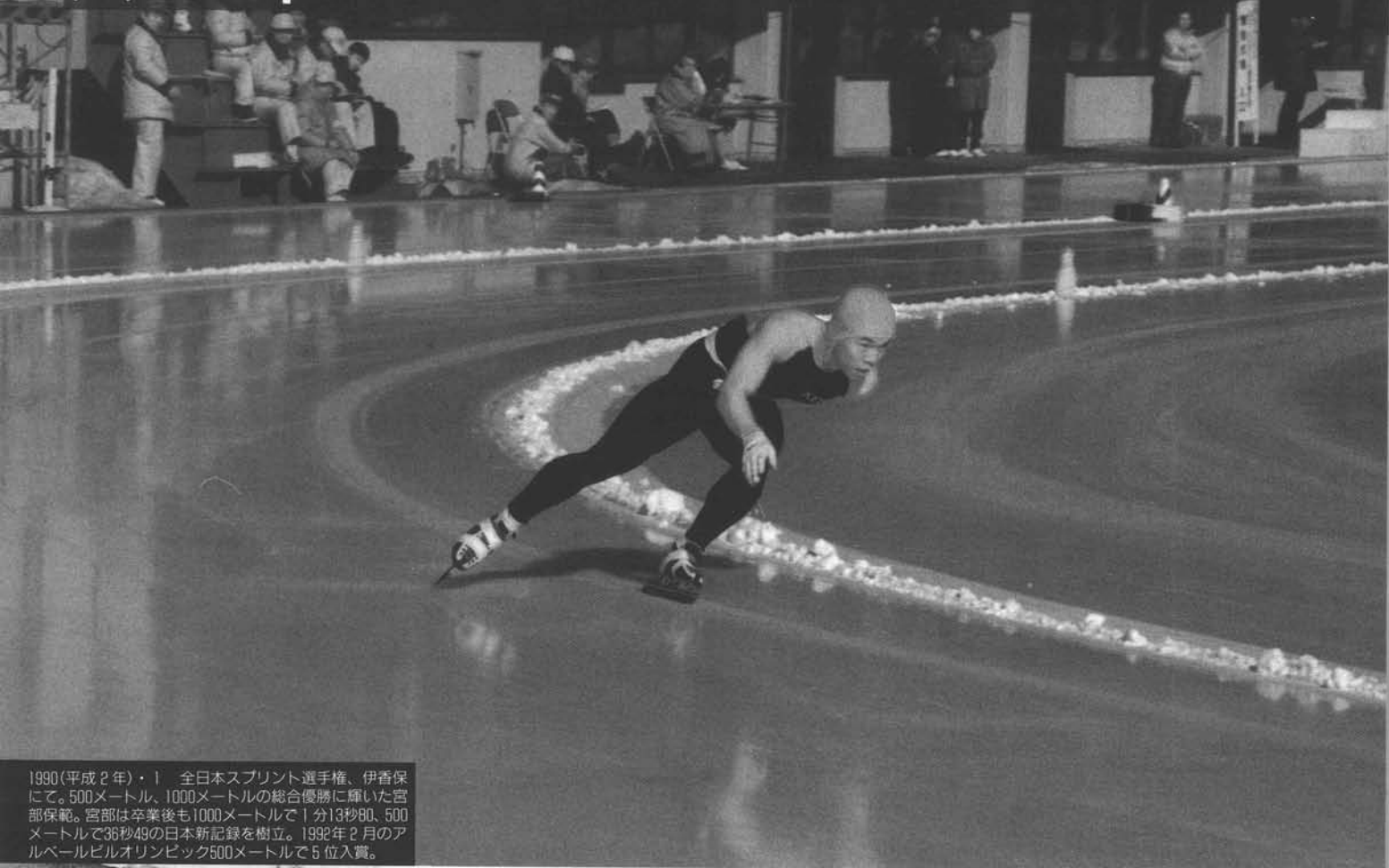
1975 東京大学リーグで2部リーグへ移る。

1982 東京大学リーグで1部リーグ復帰。

1983 東京大学リーグで2部リーグへ戻り、現在に至る。

1976~1990 全日本学生ではベスト8が2回。関東学生では8位1回。東京大学リーグでは1部リーグで8位1回、2部リーグでは1位3回となった。早慶定期戦では春季全早慶定期戦が10勝25敗1分、秋季早慶定期戦が15勝39敗1分となっている。

スピード



1990(平成2年)・1 全日本スプリント選手権、伊香保にて。500メートル、1000メートルの総合優勝に輝いた宮部保範。宮部は卒業後も1000メートルで1分13秒80、500メートルで36秒49の日本新記録を樹立。1992年2月のアルベールビルオリンピック500メートルで5位入賞。



1934(昭和9年)・1 全日本学生2000メートルリレー3位に入賞した三野、森、河村、久保のメンバー。日光にて。インドア育ちの選手として初めて全日本学生で入賞を果たした。三野勉は現、東京都スケート連盟理事長。



1949(昭和24年)・1 全日本学生2000メートルリレーで3位入賞の細川、石川、井原、野口、盛岡高松池にて。井原は後に監督、更に日本スケート連盟理事としても活躍した。石川は1975年日本人として初めて国際スケート連盟理事に就任。

1943(昭和18年)・1 全国学徒氷上競技大会5000メートルで優勝した深井恒雄。夢ノ海にて。深井は当時の10000メートルの日本記録18分0秒6保持者であったが、1944年出征、借しくもフィリピンにて戦死した。



1962(昭和37年)・1 第20回早慶戦優勝メンバー、高松池にて。当時盛岡市郊外の高松池は長野県の松原湖、白樺湖等と並んでスケート大会が出来る数少ない天然リンクであった。



1968(昭和43年)・1 スケート部の永年の常宿、佐小屋旅館前にて(長野県、松原湖畔)。早朝は玄関内でも零下10度、室内も窓際に寝た人はすきま風を受けて朝までには肩に雪が積もるほどの寒さであった。もちろん今はそのようなことはない。

1974(昭和49年)・1 第46回全日本学生選手権、日光にて。早大部員と交歓。70年代は両校とも部員が少なく、伝統の早慶戦は定期的に出来ない状態であったが、合宿、試合を通じた交流はむしろ盛んであった。



1990(平成2年)・夏 1972年より夏合宿を箱根、興禅院にて実施、現在に至っている。基礎体力作りに加え、朝夕の座禅、住職からの訓話、作務(奉仕)などを通じて、体力のみならず人間性の資質向上を図っている。



1990(平成2年)・1 全日本スプリント選手権総合優勝の宮部保範(当時4年)と大会7連覇の橋本聖子選手、伊香保にて。同年2月宮部は世界スプリント選手権でも5位入賞、持前の勝負強さで今後も世界を舞台に大活躍しよう。

1987(昭和62年)・9 シーズン最初のショートトラック競技会を目前に控え、ホームリンクのハマアイスパレスにて早朝練習に励む選手達。

スピード

1934 創成期のスピード選手はホッケー・フィギュアを掛け持ちすることが多かったが、徐々に専門化し、この年スケート部の中でスピード部門が独立。全日本学生においては1925年の第1回大会以降、常に団体3位を堅持。

1938・1 第1回早慶スピード定期戦開催。
1940・12 第16回全日本学生で深井恒雄が5000メートルで優勝。

1941・12 第5回早慶戦、10000メートルで深井恒雄は18分0秒6の日本新樹立。

1947・1 第19回全日本学生で石川、青山、細川、井原のチームが2000メートルリレーで優勝。

1950年代 毎年各種目に入賞者を輩出。団体でも3〜6位を堅持。

1954・1 第27回全日本学生で鈴木富子(現

島田)が3000メートル優勝。

1960年代 前半は50年代に築いた全日本学生の地位を保ったが、1965年以降は強豪明治・早稲田・日大に加え新興勢力の台頭、塾有力選手の故障などにより今一歩のところで入賞を逸した。一方、塾伝統のショートトラック(1992年より五輪正式種目)では学生3位の地位堅持。

1971・12 早慶戦で10年ぶりに早稲田を敗る。そのほか、ショートトラックでも日大と対抗、2位の座を占める。

1973 日本・世界の記録が飛躍的に向上する中で、受験戦争により地方有力選手の入部が途絶えた影響は大きく、この年の制度改正で2部校入り。しかし、部員の情熱と懸命な努力は諸ハンディーを次々に克服、部の活力は従来にも増していった。

1980年代以降 各部員は猛練習を積み重ね、目覚ましく成長。80年代後半には2部上位校

に仲間入り、1部昇格も目前に迫るに至った。東京生まれ、北海道育ちの宮部保範も当店で大きく成長。

1988・12 第61回全日本学生、宮部保範500メートルで37秒98の大記録をもって、1部2部総合優勝、一躍日本のトップスケーターに躍り出た。宮部は1990年3月卒業後も同年12月1000メートルで1分13秒80、1991年3月500メートルで36秒49の日本新記録を樹立。

1992・2 冬期オリンピック・アルペールビル大会スピードスケート500メートルで、宮部保範5位に入賞。

フィギュア



1957(昭和32年) 美土路燐子(現、大橋)。55、56、57年の全日本学生選手権フィギュア女子個人3連勝を記録。フィギュアスケートはジャンプ、スピン、ステップ等を組み合わせ、多彩な技とスピードを競うスポーツである。数分間という短い競技時間の中に厳しい練習の成果が発揮出来るよう体力面に加え精神面での鍛錬に力をいれている。



1959(昭和34年) 全日本学生選手権フィギュア女子個人優勝の本多久子(現、吉沢)。団体でも優勝。

1927(昭和2年) 松原湖にて。右より金子諭吉、帯谷龍一、和田吉蔵、林黄造。この年スケートクラブが体育会加入。金子は1928、30年の全日本学生選手権のフィギュア個人で3連勝し団体でも3連勝をもたらした。



1935(昭和10年) 全日本学生選手権フィギュア個人優勝の長谷川次男。35、38、39年と3回の個人優勝を記録した。



1932 OLYMPIC COMPETITORS AT LAKE PLACID

Turner, U.S.A.; Walter Langer, Czechoslovakia; Montgomery Wilson, Canada; Karl Schaefle, Ernst Baier, Germany; Gail Borden, II, U.S.A.; James Madden, U.S.A.; Gillis Grafstrom, Sweder; Nikkanen, Finland; Ryoichi Obitani, Japan; Kazukichi Oimatsu, Japan; William Nagle, U.S.A.

1932(昭和7年) 第3回冬季オリンピック、レークプラシッドにて。わが国初参加。本塾より帯谷が出場、12位だった。(右より3人目)



1936(昭和11年) 全日本学生選手権でフィギュア団体8連勝を記録。左より星野正三(優勝)、小林勝利(2位)、和田竜蔵。



1941(昭和16年) 全日本学生選手権でフィギュア団体優勝。左より中上川健一郎(4位)、最賀四郎(5位)、高山方明(2位)。高山は42年個人優勝。



1936(昭和11年) 冬季オリンピック、ガルミッシュ・バルテンキルヒェンのリンクにて。フィギュアに出場した左、長谷川次男、23位、右、渡辺善次郎、21位。



1980・4(昭和55年) ヘルシンキにて。前列右から2人目は同年2月のレークプラシッド・オリンピックに出場した五十嵐文男(9位)。彼はその後のワールドツアーに参加。五十嵐は全日本選手権フィギュア男子に4回優勝、世界選手権に5回(7位、6位、8位、4位、9位)出場した。



1966(昭和41年) 全日本学生選手権フィギュア女子個人2位の田上紗代(現、鈴木)。

フィギュア

1931・1 全日本学生で団体4連勝。以後1938年までに10連勝(1932年は中止)の金字塔を樹立。この間、個人では帯谷優勝、和田2位、小林2位2回、長谷川優勝2回、2位2回、渡辺優勝、2位、3位2回、星野優勝と大活躍。全日本では帯谷が2位に入賞。その後1937年までの6年間に和田3位、長谷川2位、3位3回、渡辺2位2回、小林2位と、優勝こそ逸したが上位入賞を毎年果たした。

1932・2 オリンピックにわが国初参加。代表2名の中に帯谷が選ばれ12位。同月の世界選手権もわが国初参加。帯谷が8位。

1936・2 オリンピック代表3名の中に本塾の2名が選ばれ、渡辺21位、長谷川23位。両名は世界選手権にも出場。渡辺16位、長谷

川17位。

1939~1940 全日本学生は団体2年連続2位にとどまったが、個人では長谷川優勝、高山3位。

1941~1942 全日本学生で団体2連勝。個人は高山が優勝と2位を記録。

1953 全日本学生男子団体3位。

1954 全日本学生男子団体3位。女子団体は1968年までの14年間に優勝5回、2位2回、3位4回を記録。女子個人では美土路優勝3回、3位1回、本多優勝、2位1回、村上2位、大岩3位、田上2位2回と活躍。

1955 全日本選手権女子、美土路2位。

1956 全日本学生男子団体2位。全日本選手権女子、美土路2位。

1957 全日本学生男子団体2位。

1958 全日本学生男子団体3位。

1959 全日本学生男子団体3位。

1960~1961 全日本選手権アイスダンスで

別所が2位2回、小野3位。1961年のペアで大岩優勝。

1974~1982 全日本男子で五十嵐が優勝4回、2位、3位3回と大活躍。全日本学生男子で五十嵐が1981年に優勝。世界選手権では五十嵐が1978年から5年連続出場し、7位、6位、8位、4位、9位と活躍。1980年2月のオリンピック男子に五十嵐出場、9位の成績を残す。

1991 高校有力選手の入学がないことから、全日本学生一部資格者は女子1名と厳しい。